

石川県白山自然保護センター普及誌

はくさん

第21巻 第3号



コゲエノヘラタケ *Spathularia velutipes* Cooke et Farlow

キノコには柄があり、高さ2cm~7cmくらいでヘラタケに似ています。柄が褐色で、短い毛を密生するほか頭部も暗色でしわを生ずるところなどでヘラタケと区別します。県内ではあまり報告はありませんが、夏から秋にかけてブナ帯の林内の地上に発生します。種小名 *velutipes* は、「足がピロード状」の意味をもっています。これは、柄に短毛を密生している様子を表しているのです。食毒は不明です。

希少動物調査を実施中

ヤマネ・モモンガ・オコジョの情報をお願いします。

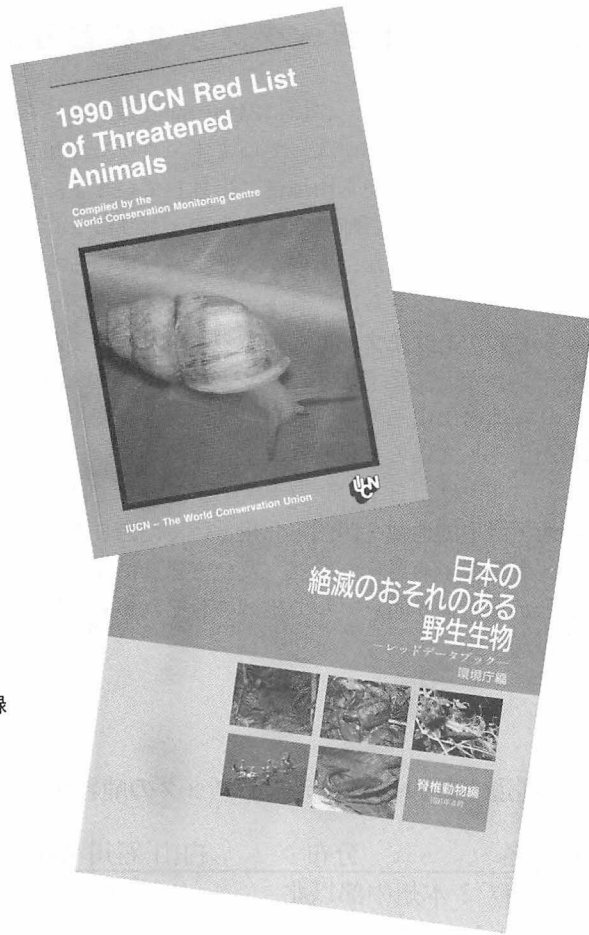
水野 昭憲



木にへばりつくヤマネ

皆さんの情報が、分布の解明と保護対策につながります。

白山または周辺県内で見たことがあるという方は、ぜひ白山自然保護センターまで情報をお寄せください。



世界と日本の「赤本」

絶滅のおそれのある動物の目録

背景

地球上で名前の付いている生物は約140万種類、無名の種を合わせると1千万種を越すと考えられています。環境の変化など人間の活動の犠牲になり、生物の中で毎年1000種以上の名の付いた生物が失われているとみられています。世界的にも生物の多様性の保全是、地球の温暖化と並んで、環境問題の大きなテーマの一つになっています。

ブラジルのリオデジャネイロで1992年に開催された地球サミットで「生物の多様性保全に関する条約」採択され、わが国でも1993年5月に同条約を批准したところです。また、1993年4月から「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（通称「種の保存法」）が施行されており、制度の整備は進んでいます。同法律には、イヌワシ、トキ、ライチョウなど38種の鳥類が「国内希少種」としてすでに指定されており、他の動植物の追加作業も進められているところです。

これらの制度の基礎になる絶滅のおそれのある動植物の目録作りも進んでいて、世界ではIUCN（世界自然保護連合）が絶滅のおそれのある動物の目録（“IUCN Red List of Threatened Animals” 1990）を発行しています。日本では、環境庁自然保護局が「日本の絶滅のおそれのある野生生物…レッドデータブック…」を発行しています。

白山でレッドデータブックにとりあげられている動物

日本版レッドデータブックには24種の哺乳類があげられていますが、石川県に分布する哺乳類約40種のうち8種が入っています。コウモリ類を除いて現在も分布が確認できる種は、主に白山の高山帯から山地帯に生息しています。白山山系と周辺4県に確認されているか分布の可能性が高い哺乳類は、表のとおりになります。

過去に分布していたが、県内からは絶滅しているものは、ニホンオオカミとニホンカワウソの2種です。さらに、日本版レッドデータブックには、特定の地方では希少種とされているものがあります。東北地方のニホンザル、西日本のニホンリス、四国・九州のニホンカモシカそして西日本のツキノワグマの4種は同種のもが白山にも生息しています。これらは白山山系では、生息環境に大きな変化がない限り、生存できるだけの十分な個体数が生息していると思われます。

ツキノワグマは、日本のレッドデータブックでは、きわめて少なくなった紀伊半島・東中国山地・西中国地域・四国・九州といった西日本のものだけがとりあげられています。しかし、生息環境の悪化と狩猟（及び密猟）によって、アジア全体で急激に分布を狭めていることから、世界的レベルで絶滅のおそれのある動物としてIUCNのレッドリストにもあげられています。

白山と周辺4県のレッドデータブックの哺乳類

種名	分布	白山	石川	福井	岐阜	富山	
アズミガリネズミ	本州中部以北	?	?		○	○	◎：分布する ○：少ない Ex：すでに絶滅 Is：孤立分布 ?：未確定
シナミスラモグラ	本州中部以北	Is	○		○	○	
シノホヒゲコウモリ	本州	?	?				
クロホヒゲコウモリ	本州	○	○				
カグヤコウモリ	シベリア、日本	○	○				
チチブコウモリ	コーカサス、中国				○		
ニホンリス	本州、四国、九州	◎	◎	◎	◎	◎	
ホンシュウモンガ	本州、九州	Is	○	○	○	○	
ヤマネ	本州、四国、九州	Is	○	○	○	○	
ツキノワグマ	アジア	◎	◎	◎	◎	◎	
ニホンオオカミ	本州（絶滅）	Ex	Ex	Ex	Ex	Ex	
ホントオコジョ	北半球	Is	○	○	○	○	
ニホンカワウソ	四国（本州絶滅）	Ex	Ex	Ex	Ex	Ex	
ニホンカモシカ	本州、四国、九州	◎	◎	◎	◎	◎	
ニホンザル	本州、四国、九州	◎	◎	◎	◎	◎	

種名は日本版レッドデータブックによる

貴重な情報

現在石川県全般に、希少動物を調査中です。白山の高山帯で孤立分布で数の少ないオコジョなどが、ライチョウのように絶滅することを繰り返さないための基礎調査も実施しています。白山または周辺の県で、オコジョ、ヤマネ、モモンガを見たことがあるという方は、ぜひ白山自然保護センターまで情報をお寄せください。これらは、すこし注意すれば他の似た動物との区別はできるものです。分布することは確かなのですが、これまでも記録が少なく、分布や生態がほとんど分かっていないという状況です。カモシカやツキノワグマのように大きくて目立つものは、出会っただけでも話題になりやすいのですが、小動物は、気にしている人でないと注意が向かないかもしれません。もともと分布範囲が限定されていて、生息密度が低いものは、調査しようと取り組んでもなかなか見つかりません。また、数の少ないものを捕獲して研究することにも慎重であるべきです。このような場合、住民や登山者などから、偶然であっても遭遇したという情報が貴重な資料になります。[だれが][何を][いつ][どこで][どんな状態で]見たかが分かればよいのです。

ホンシュウモモンガ (リス科)

ムササビに似ているが、全長25cmと小型で灰色をしている。白山のブナ林などの深い森に生息していて、夜行性であるため、人目に触れることは少ない。全国的に分布は広いが、どこでも数が少ないとされている。県内では、ブナ帯の原生林を中心に広葉樹林に分布しているが、情報が少ないことからみると、生息密度は低いものと考えられる。

ヤマネ (ヤマネ科)

日本固有の動物であることから、国指定の天然記念物にもなっている。頭胴長が7cm程度の可愛い姿で、体温を下げて冬眠する哺乳類としても知られる。広葉樹林を中心に分布は広いと考えられるが、主として夜行性であることなどから、目撃されたり採集されることも少なく、分布状況や生息密度などに不明な点が多い。

ホンドオコジョ (イタチ科)

白山山系の高山にみられる、頭から尾の先までの長さが15cmから20cmの小型のイタチである。夏は背と四肢の外側が茶色であるが、冬には尾の先端を除いて全身白くなる。白山や別山の高山部の岩礫地では、登山者の周りに現われることもあり、愛嬌のある動きで親しまれている。年間を通して亜高山帯より上で生活し、約半年を雪の中で暮らしている。白山山系は、当亜種の分布域の西限にあたり、最も近いオコジョの分布地である北アルプスからでも50km以上隔離された、独立した小さな分布地である。目撃情報からも、生息密度が高いとは考えにくく、白山の哺乳類の中では最も保護を必要とする種であろう。



ホンドオコジョ

<白山自然保護センター>

インドネシアの国立公園

野崎 英吉



マングロープの木

昨年度に続いて今年度もインドネシア共和国東カリマンタン州にあるクタイ国立公園で1983年に起こった大規模火災の回復状況調査に行ってきました。調査の内容は前回（はくさん第20巻第4号）で紹介した種子散布者とみられるジャワジャコウネコの生態の継続調査と生息動物の種の確認作業でした。調査の内容は前回とほぼ同じなので、今回は調査の間に見たインドネシアの国立公園の様子と問題点についてクタイ国立公園を中心に紹介しようと思います。



世界の熱帯林の10パーセント、生物的多様性の高い国インドネシア

インドネシアの国土の74パーセントは森林地域です。これは世界の熱帯林の10パーセント、東南アジアの熱帯林の約50パーセントに当たります。また、インドネシアの国土は世界の陸地面積の1パーセントに過ぎませんが、世界の植物種のほぼ10パーセント（約2500種）、哺乳類の12パーセント（約500種）、爬虫類と両生類の16パーセント（両生類約1000種）、鳥類の17パーセント（約1500種）の種が生息しています。有名なものを挙げると、世界最大の花ラフレシアや地上最大級の哺乳類インドゾウ、高等な霊長類の一つオランウータン、世界最大のトカゲ、コモドドラゴン、絶滅の危機にあるスマトラサイ、トラ（スマトラトラ、ジャワトラ）、バクなどの大型の哺乳類も生息しています。

ところで皆さんはウォーレス線という生物地理学上の境界線をご存じでしょうか。ボルネオ島とスラウェシ島、バリ島とロンボク島の間で生物相が異なります。ウォーレス線の西側には大型の有胎盤類である東南アジア系の生物、東側には有袋類などのオーストラリア区の生物が住んでいます。このようにインドネシアの自然は大きく二つの地域に分かれているといえます。また、インドネシアは熱帯に位置するにもかかわらず、スマトラ、ジャワ、西イリアンなどには3000メートルを越える山もあり、低地の熱帯林から高山植物まで見ることができます。こういうことでも、インドネシアは生物多様性の高い地域といえるでしょう。

インドネシアの国立公園



低地性の熱帯雨林の残るクタイ国立公園

このように自然の豊富なインドネシアには、24の国立公園があります。インドネシアでは、林業省森林保護部のなかに国立公園局があり、そこで国立公園が管理されています。インドネシアの国立公園制度そのものは1980年に設定された新しいものです。

私が1993年の1、2月と9、10月の2度にわたって訪れたボルネオ島の東部の海岸近くにあるクタイ国立公園は、1986年にできた公園で、国立公園になる前は国の野生動物保護区であったところです。マングローブ林と低地性の熱帯雨林の残るインドネシアでも数少ない地域です。約60人の国立公園職員、8つのレインジャーステーションがあります。年間の利用者も5万人と周辺の人口に対してはかなり多い方です。クタイ国立公園は、ほぼ赤道直下にあります。気温は一年中ほぼ一定していて摂氏24度から暑いときでも34度の間にあります。年間の降雨量は国立公園管理事務所のあるボンタン市で1500ミリと多い方ではありません。

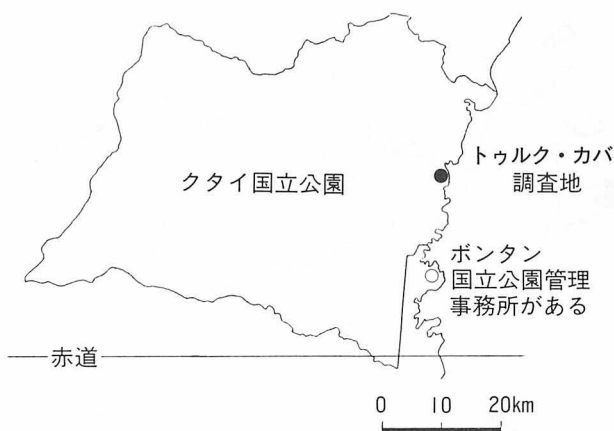
調査地トゥルク・カバの豊かな自然

私が滞在したのは、海の近くにビジターセンターのあるトゥルク・カバというところ。この辺りの森は、海の近くはマングローブ林が発達していますが、海沿いの低地性熱帯林は伐採が入り、海から遠いところに原生林が残っています。

多くの野生哺乳類が生息していて、ビジターセンターの近くで簡単に観察できるのは、半飼育のルサジカ、野生のヒゲイノシシ、カニクイザルなどです。カニクイザルの群れは毎日1度は出てきます。また、体長1メートル以上になるオオミズトカゲもときどきやってきます。野生のオランウータンは、木の葉や木の実が主な食べ物ですが、椰子の実も大

好物で、近くにある椰子の実を取りにやってきて木に登っているのを見かけます。オランウータンは夕方になると木の上に木の枝でベッドを作ってそこで眠ります。森の中にはいたるところにオランウータンのベッドがみられ、朝早く森を歩くとベッドから出てきたばかりのオランウータンに出会うこともあります。マメジカやホエジカは夜中に林道を歩いたり、朝早く森の歩道を歩くとときどき見かけます。

森には鳥類も、多く鼻の上に犀の角を突けたような大型の鳥類サイチョウの仲間や何種類ものハト類、地上には赤色野鶏がいます。そのほかの小鳥類の種類も多く、声の美しさは大変なものです。



予算の乏しいインドネシアの国立公園

日本の国立公園は入園料は無料ですが、クタイ国立公園では今年から入園料を徴収するようになりました。大人が一日1500ルピア（日本円で75円）、中高校生は一日750ルピアです。しかし、この料金だけで国立公園を運営して行くためにはまだまだ足りないでしょう。もともと国立公園に予算の少ないため、クタイ国立公園では20年前の日本製の無線機を修理しながら現在でも使っています。公用車は4輪駆動の二台だけです。一般の職員が仕事に使うのは115ccの日本製のバイクです。国立公園の管理には、双眼鏡や懐中電灯、磁石、携帯用小型無線機も必要でしょうが、それらもありません。カメラは管理事務所の本部にあるだけで、各レンジャーステーションにはありません。半年前までは、レンジャーステーションの週間報告書の罫紙もないので、白紙に三角定規で罫を作った上で、報告書を書いていました。このようにクタイ国立公園には何か公園事業をしたくてもその元手となる予算が回って来ないのです。

貧困からくる密猟や盗伐

発展途上国には、開発が遅れている分、自然が豊かであるということもいえるでしょう。インドネシアでは、このような豊かな自然が一つの観光資源であるという認識はまだ少ないようで、少なくとも一般の国民には普及していません。しかし自然を保護し、開発から守るためにはそこに住む住民の生活も向上することも必要です。現在でも、クタイ国立公園内では貧困から周辺住民によるルサジカ、バンテンとよばれる野牛の密猟があり、また樹木の盗伐が発生しています。これらの取締りが国立公園職員の主な仕事です。さて、これらの犯罪には厳罰に処することでその発生をある程度は抑えることが出来るかもしれませんが。しかし、いかに厳重に処罰しても犯罪の原因をなしている貧困が解消されるわけではなく、密猟や盗伐もなくなるでしょう。



トゥルク・カバでみられる動物たち
ルサジカ（手前）とヒゲイノシシ（奥）



ミズオオトカゲ

エコツーリズムの導入の必要性

いま話題となっている言葉にエコツーリズムという言葉があります。エコツーリズムとは、自然志向型観光と自然保護行政との合体した新しい形の観光の形といわれています。つまり、そこに生息する動植物を一種の観光資源とし、先進国からの旅行者を誘致して外貨を獲得することによって、残された自然の活用を図るために国立公園などとして整備し、自然の保護を計ると共に、地域住民に対して雇用の機会を与え、自然環境の保護を訴えていくということが主な狙いです。

クタイ国立公園を利用するにはボンタンにある公園事務所で入園手続きをしなければなりません。そこからトゥルク・カバにやってくるだけでさえ、船なら片道3万ルピア(1500円)、自動車なら5万~7万ルピア、オジェックと呼ばれるバイクで荷台に乗せてもらうと1万5千ルピアかかるわけで、それだけ地元にお金が落ちることになります。ガイドブックをしっかりと読んでこない人は、ここを別の所と間違えて、食堂やスーパーマーケットがあつて必要なものは何でも揃うところと誤って来る人もいます。スーパーマーケットほどの店は必要ないと思いますが、食料や必需品、記念品を旅行者に提供する売店や食事の世話をするコーナーがあつてもよいと思われまふ。先進国の旅行者にとっては、エアコンがなくても雨露がしのげて、小ぎれいなベッドとバストイレがあれば2000円~3000円の宿泊料は決して高くは感じないでしょう。また、国立公園内に観察路や観察施設を設置することによって、自然観察のガイド業を行うことができるようになれば、簡単には観察できない動物も観察できるようになるでしょう。例えば、野生のオランウータンやマングローブ林にいて船からしか通常観察の難しいとされるテングザルやコツメカワウソ、道の無い奥地の森林地帯にいる獐猛な野牛バンテンの観察が安全に出来るようになるでしょう。そうすれば1日3000円程度のガイド料を払つても、これらの野生動物を一目みたい旅行者にとって決して高いものではありません。これは現在の国立公園職員の1カ月分の給料に相当し、この辺りの農家の稲作で得られる3カ月分ほどの収入となります。



マメジカ



ホエジカ

観察路や観察施設ができれば
野生のオランウータンなども
簡単に観察することができる



望まれる先進国からの海外協力・資金援助

これらを軌道に乗せるためには、職員の教育や公園管理のノウハウ、公園内の道路の整備や公園施設の充実のために、日本や欧米の先進国からの技術的な海外協力や資金援助を受ける必要があるでしょう。それらが動き出すことによって国立公園職員にも仕事が増え、さらに国立公園周辺の地元民の雇用の機会が増え、生活が豊かになることでしょう。また国立公園周辺の住民にとって生活を支えてくれる自然の観光資源の重要性を認識し、保存の必要性を感じることは、国立公園と地域の自然保護にもつながると考えられます。

前回にもかいたようにクタイ国立公園周辺は天然ガスや石炭などインドネシアの重要な輸出鉱産品の宝庫であり、外貨の獲得のために周辺から開発の危機にさらされてます。また、開発途上国の自然保護は貧困との戦いでもあります。エコツーリズムを通して公園周辺の住民と共に自然の保護を図って行く新たな必要にも迫られていることが感じられました。

<白山自然保護センター>



ヒゲイノシシ

白山の自然観察会

永 吉 興



冷たい雨の中を歩く参加者

—秋の自然観察会—

去年の10月24日、別当出合にて秋の自然観察会を開催しました。前日の昼頃より白山では雪が降り、別当出合では積雪を記録しました。観察会の当日も冷たい雨が降り大変肌寒い天気でした。最初の計画ではチブリ尾根のブナ林の観察会を予定していたのですが、参加の皆さんと相談し、別当出合のブナ林での自然観察会に変更することになりました。

開会式は国設白山鳥獣保護区管理センターの中で行いました。参加者の皆さんには開会式が始まる前に、当センターが製作したビデオ「白山のブナ林」を見ていただき、白山のブナ林の仕組みを知ってもらいました。開会式では解説員の自己紹介と観察会を行う場所の簡単な案内をしました。

別当出合へ移動して、まず最初は道端に落ちているブナの実の観察です。去年は数年ぶりのブナの豊作の年で、たくさんの実が落ちていました。参加者の中にはブナの実を初めて見る人もおり、実の小ささにビックリしていました。また、この実はツキノワグマやニホンザル等動物達の餌になることを知ると、「こんな小さな実をどれくらい食べるとお腹一杯になるのだろう。」という言葉に私も思わず考え込んでしまいました。

別当出合では谷一つ挟んでチブリ尾根を見ることができます。「本来なら、今頃はあの林の中を歩いていたはずなのに。」と、参加者の皆さんと話ながら、今にも雪が降りそうな空

ブナの実



ブナの冬芽

クマの爪跡

とチブリ尾根を見ました。チブリ尾根は前日に降った雪がうっすらと紅葉の上に積もり綺麗な風景でした。

車道は雪が積もっていませんでしたが、林の中へ入って行くと雪が積もっており、雪を踏みしめながらの自然観察会となりました。かなり葉が落ちた林の中は見通しがきき、ゴジュウカラの姿も簡単に見つけることができました。雪の上では動物達の足跡、フン等のフィールドサインも見つけ易くなります。フィールドサインはその場所に動物達がいたことの証明です。別当出合の車道沿いのブナ林には、ツキノワグマが何回も木登りをした古いフィールドサインがあり、観察ができました。しかし、新しいフィールドサインは見つけることができませんでした。また、植物では冬を乗り切る姿（冬芽）を観察することができました。1時間半程度のブナ林の自然観察をし、市ノ瀬へと戻りました。

平成2年に行った秋の自然観察会では「ブナ林保護復元事業」の一環として、ブナの種を約500粒、その時の参加者にまいてもらいました。そのブナが25cm近くまで成長し、苗畑が狭くなったため、苗畑を広げて移植する事にしました。このブナの苗は、自然観察会の参加者がまいた種が育ったものです。ですから、参加者の手で植えかえてもらえたらと考え、今回の参加者に協力してもらい、植えかえを行いました。このブナは将来山へ植栽されることとなりますが、それまでは大切に育てていただきたいと思います。時間的には短い観察会となってしまいましたが、雪の中のブナ林ということで、春、夏、秋とは違った姿を参加者の皆さんには楽しんでもらえたことでしょう。



ブナの移植

参加者の皆さんが快くひきうけて下さいました。ありがとうございました。



— 自然観察会 —

当センターの普及活動として自然観察会を行っています。春と秋には、一般に募集をしてブナ林をテーマとして4時間程度。また、毎月第3日曜日には、国設白山鳥獣保護区管理センター周辺でその季節に合わせたテーマで2時間程度の観察会を行っています。

自然観察会の目的は実際に自然の中に入り、人間の体を感じるものをフルに使い自然を体験してもらい、自然の仕組みや大切さを知ってもらうことです。最近の観察会は、中高年の方の参加が多くなってきました。もっと若い人たちにもどんどん参加してもらいたいと思います。特に子供達に参加してもらいたいのです。そのためにはもっと子供達が興味を示す観察会を行うことは当然です。自然観察会というと、自然解説員が解説をし、それを参加者が聞くという一方通行的な型で堅苦しいものになりがちです。そこで、自然の中で「遊ぶ」という事を取り入れ、時には子供達や参加者が指導員となり、自然の不思議を発見していくような自然観察会にしていきたいと思っています。そして、観察会の参加者の皆さんが、自然と親しみ、そのすばらしさ、大切さを感じていただけたらと思っています。

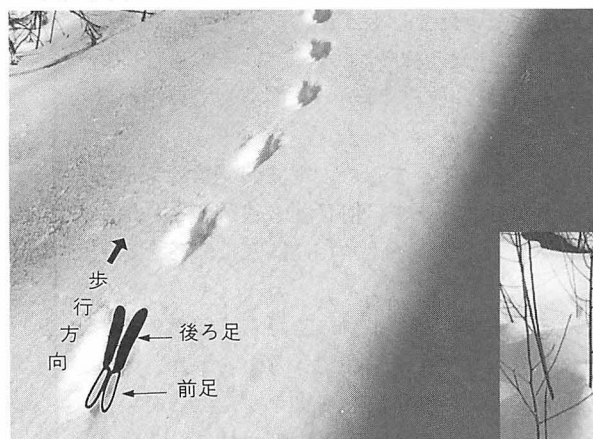
6月には今年もブナ林の自然観察会を開催する予定です。みずみずしい若葉の萌えるブナ林に一度、おでかけになってはいかがでしょうか。

＜白山自然保護センター＞

雪の上の足跡

普段はなかなかみつけれない動物たちの足跡
雪の上ではその跡がはっきり残るため見つけやすくなります。

ニホンリス



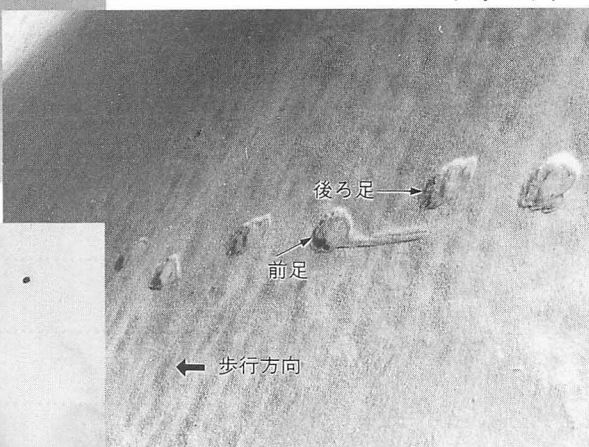
ノウサギ



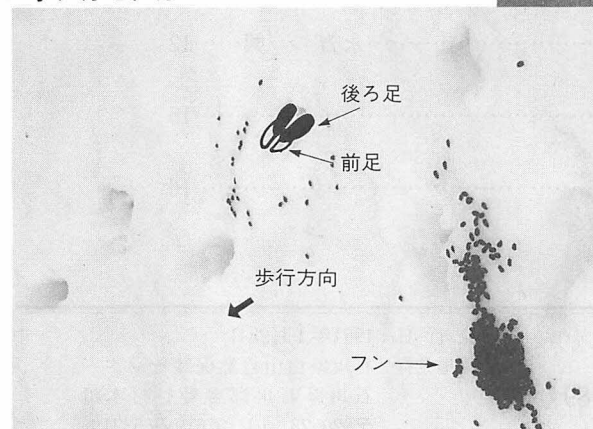
ニホンザル



ツキノワグマ



ニホンカモシカ



たより

白山自然保護センターの前にある柿の木は、雪がつもる前はたくさんの実をつけていました。しかし、雪がつもりはじめると動物達が食べたのでしょうか、いつのまにかなくなってしまいました。山の動物達もエサが雪の下に埋まってしまう、大変なのではないでしょうか。

今号で紹介した「雪の上の足跡」はいかがだったでしょうか。ブナオ山観察舎周辺でもイヌワシやニホンカモシカ、ニホンザルの観察だけでなく、いろいろな動物の足跡も見ることができます。興味のある方は、ぜひ、暖かい支度をしてお出かけ下さい。

先日、ニホンザルに発信器を取り付けることができました。電波の発信源を追跡していくと、発信器をつけたサル居場所が分かります。何日間も追跡できれば、サルがどのように移動していくかが分かります。この冬、サル達はどこで冬を越すのでしょうか。

中宮展示館の展示改修の準備もすすんでいます。どのようにしたら来館者の方に白山の動物や植物、人々の暮らしについて分かりやすく解説できるだろうか、楽しめるだろうか、いろいろと考えています。よりよい展示になるようがんばっているところです。新しい展示は、ブナ林を中心にしたもので、実際にブナ林にいるような体験ができるようにしたいと思っています。ご期待下さい。

(野上)

目 次

表紙	コゲエノヘラタケ	……………	米山 競一	……………	1
希少動物調査を実施中 ヤマネ・モモンガ・オコジョの情報をお願いします	……………	水野 昭憲	……………	2	
インドネシアの国立公園	……………	野崎 英吉	……………	6	
白山の自然観察会	……………	永吉 興	……………	12	
雪の上の足跡	……………		……………	15	
たより	……………		……………	16	

はくさん 第21巻 第3号 (通巻89号)

発行日 1994年1月28日
編集発行 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920-23 Tel 07619-5-5321
印刷所 株式会社 橋本 確文堂